

入学式式辞

皆さん、ご入学おめでとうございます。今日から本学の一員となられた皆さんを、大阪観光大学は心から歓迎いたします。

本学は、「自由を共に楽しみ、社会を共に生きぬく」というスローガンの下で、人生を「楽しむ力」の育成を教育の柱として掲げています。何かを楽しんでいる時、人は喜びや幸福感に包まれます。それは、自分がやりたいこと、好きな目的に向かって進んでいる時に、またとくにその目的を達成できた時に強く感じる気持ちです。

このように、今「楽しむ」ことを大学教育の基本理念として掲げることには、歴史的な根拠があります。同じような状況が、実は封建時代から近代・現代の社会システムへ、すなわち資本主義社会へ移行する時期、西暦で言えば18世紀から19世紀にかけてみられました。

1785年、当時25歳だったドイツの詩人・思想家シラーは「喜びに寄せて」(An die Freude)という詩を発表しました。この詩には曲も付けられ、またたくまにドイツを初めヨーロッパ各国で歌われるようになりました。その4年後の1789年には、絶対王政の打倒、共和制と自由主義を掲げたフランス市民革命が勃発します。

ちょうどボン大学に入学したばかりのベートーヴェンは、この詩に大きな影響を受け、その後市民革命に触発された交響曲をいくつも作曲していきます。そして、1824年にその集大成として交響曲第9番を完成させます。この交響曲は、シラーの「喜びに寄せて」が提起した「苦しみから喜びへ」をテーマとしていました。次の歌詞から始まる「喜びの歌」は、いまやEU (European Union) の国歌と言われるほど世界中で歌われています。

Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium. Wir betreten feuertrunken. Himmlische, dein Heiligtum!

こうした歴史が示していることは、「楽しみたい」という感情一別な言い方をすると苦しみや抑圧からの解放、すなわち喜びを求める感情が、当時の社会全体に広く深く共有されていたということです。そして、皆さんがこれから本学で学ぶように、200年余りの時を超えて、今「喜び」、そして「楽しみたい」という気持ちが再び強く意識される状況になっています。なぜでしょうか？

かつてのような身分的支配としての封建的抑圧は、多くの国々ではあまり見られなくなりました。しかし、それに代わって今日では戦争や世界的な気候変動などに伴う苦しみや不安が蔓延しており、人々は大きな不幸・苦しみ・不安に直面しています。苦しみや不安の増大は、反面で喜びや楽しみを求める気持ち、抑圧的状况から脱して自由と平和を獲得したいという切実な願望を強めます。

さらに、シラーの時代と異なるのは、喜びや楽しむことへの願望それ自体が広がり深まっていることです。

まず、広がりという点では、こうした願望は市民革命の主要な舞台であったヨーロッパにとどまらず、今日では格段にグローバルな規模で現れていることです。私達が暮らしているアジアの国々もまた同じです。

深まりという点では、観光のグローバル化、高度化が象徴するように、自由時間における自己実現欲求が市民の間で顕著に高まっていることです。アメリカの心理学者マズローによれば、「自己実現欲求」とは「偽りのない自分の姿で好きなことをして、それが社会貢献につながる状態」を意味しています。さきほど、楽しむということは、自分がやりたいこと、好きな目的に向かって進むことだと述べました。喜びや楽しむことへのこだわりが強まることは、その限りでは、マズローが人間の最高の欲求だと述べた「自己実現欲求」が市民レベルで強まっていることを示唆しています。

最後に、この「楽しむ力」の発展にとって、忘れてはならない二つの条件を指摘しておきたいと思えます。

第1に、この「楽しむ力」は、自分一人で実現できる力ではなく、世界の人々と「共に楽しむ力」です。したがって、その前提は世界平和の実現です。Tourism for Peace!!! さきほど触れた「喜びの歌」は続いて次のように述べています。

Deine Zauber binden wieder, Was die Mode streng geteilt; Alle Menschen werden Brüder . . . (喜びの魔力は時の流れが強く切り離れたものを再び結ぶ。すべての人々は兄弟となる)。マズローの「社会貢献につながる」という指摘も同じ内容です。その意味で、「楽しむ力」は「共に楽しむ力」なのです。

第2に、この「楽しむ力」の実体は、自由を求める知性と感性との総和です。かつてドイツのオーケストラ指揮者であったフルトヴェングラーは次のように述べています。「芸術においても人生においても、結局のところ一切が一まさしく一切のものが一知性と感性との適切な総合ということに帰着する」(『音楽ノート』白水社)。知性と感性、このどちらを欠いても豊かな「楽しむ力」を持つことはできません。

本学は、多くの国籍・民族の人々が集まり、まさにグローバルな交流と環境の中で自由な自己実現のあり方を対象とする観光学を学ぶ場です。すなわち、この新たな社会的転換期を生きていく意味を認識し、主体的に未来社会を切り開いていく学びを探求できる場です。ここにいる皆さん、本学に入学された皆さんが獲得した最大の優位性こそは、まさに今日からそうした大学コミュニティの一員となったことにあります。どうか、そのことに誇りを持って下さい。

そして同時に、それをどこまで実現できるかは、皆さんの姿勢と努力にかかっています。私達は、皆さんの学びを全面的にサポートします。大阪観光大学でのキャンパスライフを共に楽しみましょう。

2024年4月1日

大阪観光大学 学長 山田良治